

# 奢侈としての意識 —普遍経済学から見た意識—

## La conscience comme luxe —L'économie générale et la conscience—

高橋 紀穂

Kiho TAKAHASHI

**<要約>** 本稿の目的は、ジョルジュ・バタイユの普遍経済学における、意識の問題を整理することにある。

議論は以下の手続きで行われる。第2節においては、『呪われた部分』における普遍経済学の概略を説明する。第3節においては、おもに『宗教の理論』から意識の問題を論じる。第4節においては、物理的的局面と意識的局面における消尽の様相を論じる。第5節においてはこれまで述べてきた普遍経済学の観点から、奢侈としてある意識を明確に捉えなおす。これらの論を通して普遍経済学的視点から見たとき、意識が、奢侈性、物理的生産性への寄与、物理的破壊性への寄与、意識そのもの、および人間の個性の生産および破壊、という性質をもつことを明確にする。最後の第6節「おわりに」においては、これまでの議論を整理するとともに今後の課題が提起される。

**<キーワード>** 普遍経済学、意識、奢侈、労働、消費

### 1. はじめに

バタイユが構築した「普遍経済学 [économie générale]」はその名前から経済学——ある時はそれ

以上に優れた、そしてまたある時は奇抜で不可思議な——の一つとして考えられることが多い。しかし、内容を見れば分かるように、その「経済学」の主眼は地表上のあらゆる現象をエネルギー論から説明することにあつた。(太陽)エネルギーを基礎にした人間活動の理論は、当然、その消費的側面と増殖(生産)的側面が扱われることになる。この理論が「経済学」と呼ばれたのは、それゆえである。

しかし、バタイユはこのエネルギー論の観点から人間の意識の問題にも光を当てている。本稿の目的は、普遍経済学における、意識の問題を整理することにある。バタイユの視点を取れば、意識もまた、エネルギー現象の一つであるということになる。経済(学)的に意識の問題を取り上げるというのは、たしかに奇抜な視点ではある。そしてそれゆえ、この問題が真正面から捉えられたことはなかったように思われる。したがって、本稿ではこの問題を整理することに焦点が当てられる。

そのための手続きとして、まず、普遍経済学の概略を俯瞰しておこう。

### 2. 普遍経済学

普遍経済学の全貌が明らかにされるのは1949年

に発表された『呪われた部分』においてである。バタイユはこの著作に 18 年の歳月をかけたと言う (Bataille[1949:52=1973:15-16])。それゆえ、この理論、あるいはこの理論の萌芽的思考については他の論考においてもその一部が垣間見られる。たとえば、1943 年発表の『内的体験』の脚注においてはすでに「普遍経済学」という用語が登場し、わずかながら説明がある (Bataille[1973a:215-216 =1998:408-409])。あるいは、1938 年に社会学研究会で発表された「牽引力と反発力」の原稿にはすでに社会を消費的視点から捉える思考が見られる (Hollier[1979:188-231=1987:181-240])。さらにもっといえば、エネルギー論的発想 1920 年代に執筆されたと思われる彼のもっとも初期の「松毬の目」というエッセイからもうかがえる (Bataille [1970:13-47=1971:187-282])。このような点を考慮すると 18 年どころか、バタイユの言うとおりの彼の思索の初期からエネルギーの流動論的思考が存在したと考えるもよさそうである。そしてまた、その思考が体系的にまとめられたのが『呪われた部分』と見なせるであろう<sup>(1)</sup>。

先述したように、ここではエネルギー論という視点から人間活動の全般を捉えるという壮大な試みが展開される。とりわけ、「第一部 基礎理論」と題された部分においては、そのエッセンスが凝縮されている。まず、ここで展開されている議論を素描しておこう。

出発点は太陽エネルギーである。「太陽は与えるだけで決して受けとらない」(Bataille [1949:68=1973:35])。したがって、地表上にあるエネルギーは常に過剰である。結果、人間に突きつけられる最大の問題は生産ではなく消費の方法ということになる。こうしてバタイユは、徹底的に人間文化の中の過剰性と消費活動を暴きだす。採り上げられるのは、供犠、贈与、戦争、宗教的奢侈、祝祭等々。バタイユはこのような現象が常に人間の生活の傍らに横たわってきたことを明らかにする。たしかに、生存のためのエネルギー摂取にも困窮しているとすれば、このような行為をなす必要はまったくない。ということはすなわち、この世界にはエネルギーは

常に過剰であったということになるだろう。

もう少し詳しく見てゆこう。

地表上の存在は太陽からエネルギーを受けとる。第一に、そのエネルギーは「生命維持に必要以上」のものである (Bataille [1949:60=1973:24-25])。次に、その生命維持を上回るエネルギーは「成長」に役立てられる。さらに、成長が限界に達すると、このエネルギーは消費に当てられるしかなくなる (Bataille [1949:60=1973:25])。だがしかし、成長に充当されるエネルギーも過剰エネルギーであることには変わりはないということには注意しておこう (Bataille [1949:73=1973:42])。このことは、生命体の進化そのものが過剰エネルギーの消費の一形態であるという考えに裏打ちされている。つまり、無機物から有機物、さらにはそこから動植物の進化そのものがすでに、過剰の消費にしか過ぎない。一言で言えば、進化そのものが過剰エネルギーの消費として捉えられていると言ってもよいだろう。換言すれば、バタイユにとって、進化とはまったく不要の出来事、すなわち、「奢侈」の一形態なのである<sup>(2)</sup>。

バタイユはまず、このような観点を提示する。そして、この観点から、議論は人間の事象を採りあげることになる。労働、生産、消費、宗教、こういったものが俎上にのせられる。

ここではまず後に取り上げる意識の問題と深くつながる「労働」に注目しよう。普遍経済学的視点から見られた労働とはいったいどんなものか。

労働とは、第一に、過剰エネルギーを活用、すなわち、消費する行為である<sup>(3)</sup>。ということは、労働もまた、奢侈の一形態とみなすことができる。つまり、人間は労働によって、過剰エネルギーを消費しているのである。

第二に、やがてその労働により生み出された生産物や技術がもとになり、過剰エネルギーがより増大してしまう<sup>(4)</sup>。ここには重要なパラドックスがある。すなわち、労働という消費的行為が何事かを生産してしまう、というパラドックスである<sup>(5)</sup>。われわれは、後にこの人間存在にかかわるパラドックス、すなわち二重性をふたたび取り上げる。

労働へ戻ろう。

労働は過剰を増大させる。この彼の理論は近代社会批判、とりわけ、彼の同時代に起こった二度の戦争についての熟考と批判へと行き着く。バタイユはこの二度の戦争とは、人間が過剰エネルギーの取り扱いを間違えた結果生じた結果であると指摘する (Bataille [1949:78-1972:48])。ここでバタイユが同時代のきわめてアクチュアルな問題意識に突き動かされてこの書物を世に出した事が理解できるであろう。地表上は過剰で満ちている。それを戦争とは異なる形態で解放せねばならない。このような問題意識がこの書にはあふれている。そしてまた、バタイユはその解決策の糸口を示そうとする。

バタイユはまず、人間が過剰の消費を、なぜ戦争という悲劇的な方法によってなしたのかを説明する。それは何よりも「自覚」の欠如から生じている。すなわち、人間と過剰エネルギーとのかかわりの認識を持たなかったゆえに起こった悲劇である (Bataille [1949:62-65=1972:27-31])。だからこそ、歴史的資料が必要となる。こうして、「第一部」は「第二部」以降の歴史的資料へと向かうことになる。ここでは、人間が常に浪費、消費、破壊と関わってきたことが説明されている。こうしてバタイユはわれわれに浪費、消費、破壊への自覚を促す。同時に、そこにおいて、過剰の消費の必要性とその方途を説明しているのである。さまざまな歴史的資料を考察することにおいて、戦争以外の過剰エネルギーの処理の仕方を考える道を切り開くのである。

もう少し立ち止まろう。では、なぜ人間は自分達が消費や破壊とともに歩んできた事実から目をそむけるのだろうか。なぜ、消費、浪費、破壊、奢侈は呪われるのだろうか。

この疑問は、なぜ人間は消費、浪費、破壊を退ける意識を持つか、という疑問に換言することができる。

つまり、意識の問題がここで浮上する。

なぜ人間は消費、浪費、破壊を退けるのか。バタイユは確かに『呪われた部分』においては人間が消費、浪費、破壊と密接なかかわりを持ち続けてきたことを歴史的資料を用いてわれわれに見せてくれる。しかし、それだけで人々は過剰の消費へと向かうだ

ろうか。あるいは、富の贈与へと向かうだろうか。意識がそれらから目をそむける性向を持つのなら、どれほど資料を積み上げようとも人は見向きもしないであろう。歴史を知り、過剰を自覚するだけでは不十分である。人間が個体として持つ、この人間的意識を徹底的に説明することも外すことができない。歴史的資料は、その上でこそ意味を持ったものとして人々に映るだろう。こうして、自己意識の性質と消費、浪費、破壊の重要性はセットとしてはじめて説得性を持つということが理解されることになる。しかしながら、自己意識の問題は『呪われた部分』において十全に議論されているとはいえない。それが十全にとり上げられているのは、『呪われた部分』とほぼ同時期に書かれたと思われる『宗教の理論』においてである<sup>(6)</sup>。

したがってここからは、おもに後者の書物を参照にしながら意識の問題を取り上げよう。

### 3. 自己意識

バタイユの議論においては、自己意識は道具の利用により生じる。そしてまた、労働過程においてじょじょに完成されてゆく<sup>(7)</sup>。

道具の使用とは、使用している人間存在を自然的直接性から引き離す。空腹の虎は獲物の頸動脈に噛みつく。ここにおいて噛みつくという行為と食べるという行為に隔たりはない。ところが、道具を利用すると事情は違ってくる。槍を投げて獲物を倒す時、槍は獲物と人間のあいだに入り込んでいる。人間は槍を「獲物を殺す」という目的のために利用している。槍を投げ、殺し、食べる。虎においては「噛みつき殺す」という行為と「食べる」という行為は一体であった。しかし、道具を利用する人間は食べる行為に至るまで三つの過程を分離することになる。この分離は「目的」という局面を人間に与えることになる。槍を投げるのは獲物を殺すため、獲物を殺すのは食べるため、食べるのは自己を生きかすため、というように。あるいはまた、「手段」という局面をも人間に与える。槍を投げるのは殺す手段、殺すのは食べるための手段、食べるのは生きるための手段、

というように。自然的直接性の中にいる動物達にそれらの局面は存在しない。上述のように、「噛みつき殺す」と「食べる」が一体となっているからである。したがって、道具を利用している時、人間は直接性から離脱していることになる。

道具を製作する、という行為においても同様のことがひき出せる。道具を製作する人間は、未来の成果を期待しつつ道具を製作している。第一に、道具の完成。第二に、その道具を使って何事かを成就することを。この時、この人間は彼の全ての生を「今、ここ」という現在の中に投入しているわけではない。彼は、未来の成果を享受する自己の生を夢見ながら、現在のところ、我慢、忍耐、努力をあえて甘受しているのである。したがって、彼は「今、ここ」を十全に生きていない。他方、動物の生きる直接的生とは「今、ここ」しかない。したがって、動物は我慢も忍耐も努力もしない。空腹になれば獲物を追いかけて、満腹になれば獲物が前を通り過ぎて見向きもしない。これこそが直接性であろう。ところが、道具を製作する人間は「今、ここ」という直接的生を放棄し、未来の成果を期待する。こうして、人間は直接性から離れる。ここに人間が労働の局面でとる独特の存在の仕方がある。労働とはすべからず「今、ここ」を十全に生きることの放棄と未来の成果への期待とつながっているからである。

しかしここで立ち止まってみよう。

道具を作ることが労働であるとすれば、それもまた、過剰の消費ということになるだろう。考えてみれば、道具などなくても獲物や木の実を獲得することは可能である。それは一種の奢侈である。バタイユは別の論考において「労働には審美的目的もあった」と言っている (Bataille[1988c:115=1973:34])<sup>(8)</sup>。労働は確かに、直接性から離脱させる行為である。そしてまた、より多くの過剰を生み出す行為でもある。しかし、他方で、それは消費的行為でもある。労働はこのように二重性を持つ。この二重性を見逃すとバタイユの議論を半分しか見ていないことになるだろう<sup>(9)</sup>。

では、意識についてはどうか。上述のように、道具の製作、利用あるいはそれを用いた労働は未来と

いう「今、ここ」を越えた時間軸を切り開く。この時、人間の意識は（「今、ここ」という軸しか持たない）動物のそれとは大きく変化することになる。労働している人間は我慢、努力、忍耐を甘受している。それができるのは、この苦勞の向こうには「成果を得る」という期待（＝目的）があるからだ。しかし、その途中で自己が死ねばこの苦勞は水の泡となる。未来を切り開いた人間の意識はこのように変化するだろう。つまり、第一に目的と手段の系についての意識を手に入れ、次に、期待、そして最後に自己の死を意識することになる。さらに、この意識から導き出された死の知覚は人間を恐怖に陥れるだろう。なぜなら、死は我慢、忍耐、努力の向こうにある成果の獲得を不可能にするものだからだ。

こうして人間は死を恐怖するようになる。換言すれば、未来を期待する人間のみが自己の死を怖れることになる。

ここでもう一つ、死の知覚とはまず、自己の死のそれであることを付け加えねばならない。すなわち、人間が強烈に自己を意識するのは、まずもって、自己の「死の知覚」という事態の中においてなのである。なぜなら、他者の死は労働の成果を破壊しないから。自己の死だけが我慢、忍耐、努力を無為に帰すから。苦役が無駄に帰し、成果を手中におさめることを阻む、自己の死。これがまずもって人間を恐怖に陥れる。したがって、自己意識とは自己の死の意識を必要条件として持つ<sup>(10)</sup>。だから、バタイユの論理においては、労働もせず、未来の成果の期待も持たない動物には死の知覚は存在しない。そして、死を知覚しない動物には自己意識も存在しない。

労働する人間は死を恐怖する。それゆえ、死からできるだけ遠ざかろうとするのである。この意識はひたすら人間に生産と蓄積をうながすことになるであろう。

このように、労働は目的・手段の意識、自己意識、自己の死の意識を導く。そして、このような意識は死を忌避する性質を持つだろう。さらに、この性質を持つ意識は死につながる破壊、浪費、消費をも忌避するようになる。バタイユにとっては、この意識の性質こそが過剰とその消費という重要な事実を覆

い隠し、結果、人間に悲劇をもたらした原因に見えたことであろう。

#### 4. 破壊、浪費、消費

バタイユは労働の局面に破壊、浪費、消費の局面を対置する。

この局面は至高性という用語で示され、労働の局面が有用性と示されることもある。

至高性とは端的にいえば自然的直接性の世界のことである。バタイユはこの世界を「連続性」という言葉でも表現する (Bataille[1987:21=1973:22-23])。なぜなら、この世界は諸存在が「水の中の水」のようにつながっているからである (Bataille [1973b:25=1985:23])。バタイユは宗教社会学的な表現をする時には、この世界を「聖」という言葉でも表現する。つまり、至高性、聖性、連続性とはみな自然的直接性の局面を示す。対して、有用性、俗性、非連続性とはみな、労働の世界の局面を示す。

人間は労働し自己意識を持った時から自己とそれ以外のものを区別する。それゆえこの連続性から離脱し非連続な存在となっている。しかし、バタイユは人間が連続性の世界へ「郷愁」を持つという。そこへ戻りたいという気持ちを常に持っていると言う (Bataille[1987:21=1973:22])。そして、古代の祝祭の時空でなされていたのは、この気持ちに沿った行為である、と考える。その要諦は、自己意識を崩壊させることにある。自己意識とは死を恐怖し、そこから遠ざかることにより成立している。したがって、死に近づけばそれは崩壊し、連続性の世界へと回帰できる。もっとも簡単な手段は、実際に、物理的に死ぬことである。死ねば人間は自然界の物質となり、連続性の中に入ることができるだろう。人間はそれを夢見る。こうして、人間の欲望とは死へ向かうものとなる<sup>(11)</sup>。しかし、人間は、それに魅かれつつも抵抗する (Bataille[1987:139-141=1973:203-206])。つまり、人間は一方では死の回避を望み、一方では連続性を手に入れたいと望む。この気持ちから人間は聖と俗の二世界を生きることになる。

聖なる世界で人間は連続性の世界へと近づく。そ

こで意識は「何ものでもないもの」となる (Bataille [1976e:254 =1991:19])。つまり、労働と連動している意識、すなわち、認識、理性、知性を喪失することになる。ここでなされる代表的行為が、供犠である。生贄を殺し、その姿に自身を重ねあわせ、擬似的な死の体験を得る。あるいはまた、贈与、破壊、オルジー、舞踊等々もまたそのような体験をうながす。

これらはすべて破壊、浪費、消費に通じる非生産的行為である。つまり、連続性とは、何がしかに固定化したエネルギーをできるだけ流動化させる——バタイユの言葉で言えば、「消尽 [consumation]」させる——行為によって導かれる。

もう少し詳細に見てみよう。

生贄の破壊、事物の破壊、贈与、これらはみな有用な存在 (生贄に選ばれる動物は基本的には家畜である) をバラバラにする行為である。このような行為が古代の祝祭空間においてなされたのは、これらがみな生存にはかかわらない過剰の物だからである。実際、これらがなくても人間は死なない。たしかに、生産物や家畜を周囲に揃えている方が便利であるかもしれない。あるいは、飢えをしのげるかもしれない。あるいは、死の不安をやわらげられるかもしれない。あるいは、寿命を延ばすことができるかもしれない。しかし、それだけのことである。他の動物はそれらを持たずとも生きている。とすれば、人間だけがそれらを持たねばならない理由などない。

供犠や贈与の儀礼は、生贄や贈り物を目の前から消滅させ、個性性を消滅させ、それを見ている人間に自身の消滅を想像させようとする所作に他ならない。ここで問題となっているのは生産物の消尽だけでなく、人間の意識の破壊である。一方、オルジー、舞踊などは、肉体に宿る剰余エネルギーを消費することにより意識の破壊を導くものとしてあるだろう。

このように聖なる世界では、過剰の破壊と意識の破壊が連動している。

この局面をより明確にするために俗の世界をもう一度振り返ろう。俗の世界においては、労働が行われる。この労働は生産物と自己意識をもたらす。労働とは、過剰エネルギーの消費によってなされる行

為である。したがって、それにより生み出されたものが過剰物なのであった。このことは意識にもあてはまるだろう。すなわち、労働が契機となり生み出された意識もまた、過剰エネルギーの消費により生み出された生産物なのである。だからこそ、両者は、聖なる世界で、労働とは逆の操作である破壊的行為を通し、エネルギーが流動する形態に戻され——消尽され——なければならない。

## 5. 奢侈としての意識

これまで見てきたように、普遍経済学の前提はエネルギーの流動である。第一に、エネルギーの流動がある。それが一時的にせき止められる。しかし、それはいずれまた流れ出す。たとえば、星の生成もこのように捉えられる<sup>(12)</sup>。地表上の物質としてのエネルギーもまたこのように捉えられる。それは一時的に星や物質であるに過ぎない。すでに、バタイユが考える進化の概念を見たが、そこでバタイユは無機物から有機物の変化を消費の一形態として考えていた。ここから、消費された後にあらわれる物質も生命もこの一時的な形態に過ぎない、という思考に行き着く。

消費の後にあらわれた形態として物質や生命を考えると、それは奢侈ということになる。奢侈という言葉の意味するところは、あってもなくてもいいもの、つまり過剰物ということである。ここには、それらがやがては流れ行くエネルギーでしかない、という思考がある。だから、生命も奢侈である。進化そのものが奢侈の一形態なのである。ここから、生命も進化も「必要／不必要」という尺度にはあてはまらない、ということが分かる。

「必要／不必要」という尺度は、ある目的を設定した場合のみ意味を持つ<sup>(13)</sup>。たとえば、稼ぎ手としての父親は、「家族の生活を維持する」という目的を設定する限り必要とみなされるかもしれない。あるいは、オゾン層は「地球を存続させる」という目的を設定する限りでは必要であるだろう。しかし、宇宙規模で見た場合、「必要／不必要」という尺度は意味を持たない。宇宙に目的がないからである。少

なくとも、現段階でわれわれはそれを知らない。現在のわれわれにとって宇宙とは、ただエネルギーが流動している場でしかない。宇宙の目的が分からない以上、たとえば、宇宙にとって地球は必要か、という問いは意味を持たない。地球とは、ある種のエネルギーが一時期、太陽系の一つの星として存在している状態の呼び名に過ぎない。すでに述べたように、やがて時期が来れば地球も崩壊し、そこに存在していたエネルギーは、分散し、別の形で宇宙を流れ行く。

人間という生命体も、エネルギーがたまたま人間という生命体という形に生成しているだけでしかない。普遍経済学の視点を進めるとこのような思想に行き着く。だからといって、バタイユが人間の生命をないがしろにしているわけではないことは本稿第2節で示したとおりである。彼は、過剰の消費を戦争という悲劇的消費へ向かわせないため、『呪われた部分』を著した。その内部において、この過剰性の認識の必要性が説かれている。バタイユからすれば、このエネルギーの流動論の自覚なくして倫理はありえない。

このような普遍経済学の視点から意識の問題をまとめておこう。

意識もまた、普遍経済学の視点から捉えた時、それは奢侈の一形態、あるいは過剰物となる。それもまた、エネルギーが人間の脳内で過剰エネルギーの消費によってあらわれた、ある一つの形式にしか過ぎないといえるだろう。そして、この意識の中心に座するのが、目的／手段の連鎖の思考と「死を遠ざける」思考である。

俗の世界において、意識は「できるだけ死を遠ざける」という目的を持つ。そのとき、労働は必要事項となり、生産物は必要物と映る。われわれは暖房やコンピューターを必要物と捉える。それは、できるだけ死を遠ざけたいからである。個体としての生命を維持したいからである。動物はそのような人間的目的をまったく持たないかほとんど持たない。したがって、労働を行わないし、生産物も保持しない。目的を持つことにより、エネルギーの流動はせき止められる。目的とは人間の世界を区切り、エネルギ

一の流動をせき止める壁のごときものになるだろう。ここで人間の意識は個体化し、人間存在も個体化する。

だがしかし、この目的の壁をぶち破る物がある。それが他ならぬ、意識である。前述したように意識は連続性を希求する。この意識だけがエネルギーの流動を回復させることを命じる<sup>(14)</sup>。したがって、意識は相反する二つの性質を持つ。一つは死を回避しようとする性質であり、もう一つは反対に意識そのものの破壊へと向かう性質である。前述した人間的生の聖俗二世界への分離とは、この意識の性質とパラレルに成立している。

俗なる世界においては意識の前者の性質が優位を占める。したがって、行為としては労働が優位を占める。しかし、もともと意識の生成自体が過剰の消費活動の一環なのであった。意識は労働の中において、自身を高度なものへと練り上げるが、その生成変化もまた身体に過剰エネルギーが存在するからこそ可能となるに過ぎない。つまり過剰エネルギーを消費しつつ生成変化している。したがって、意識もまたエネルギーのある一つの形式に過ぎない。とすれば、このものもまた解体され流動されなければならない。意識の基礎にもエネルギーの消費活動がある。

古代の祝祭空間はこの意識の消費形態を典型的に示すものである。そこでは行為としても消費活動——供犠や贈与——がなされるが、意識もまた消尽される。それはたとえば、生贄の殺戮を見ることによって消尽されるし、あるいは、舞踊やオルジーの興奮によっても消尽される。古代社会ではこうした聖なる世界を俗なる世界の傍らに置いていた。さらには「生産は非生産的破壊に服従していた」(Bataille[1973b:118=1985:117] 強調バタイユ)。すなわち、聖の世界こそが重視され、俗の世界で生み出された意識と生産物は、聖なる世界においてことごとく破壊されていただろう。

ところが、やがて人間はただ生産だけに価値を認める世界を作る。なぜか。

俗なる世界の労働とは第一にエネルギーを消費する行為である。しかしその行為はすぐさま何かを生

み出してしまふ。このパラドックスは、意識にもある。意識もまた消費——たとえば供犠や舞踊における消尽——を行う。この時、意識は連続体へと向かっている。しかし、聖なる時空においても意識は完全な消尽状態にはいたらない。それが完全性をあらわるのは個体が死んだ時だけであるのだから。生きて儀礼を遂行している限りそれは必ずある程度は明晰な意識である<sup>(15)</sup>。どれほど意識を破壊しても、意識は自身を維持しようとする<sup>(16)</sup>。したがって、生きながらえた人間の意識はすぐさまより肥大した意識を生み出す。なぜなら、その儀礼を意味づけるだろうから<sup>(17)</sup>。したがって、いくら意識が消費へ向かっても、意識は常に肥大する。バタイユはここに至高性が有用性へと「横滑り」する契機を見た。この意識の性質が、生産にのみ価値を置く近代を準備することになったのである<sup>(18)</sup>。

## 6. おわりに

意識は知的かつ客観的に何事かを認識し、生産的行為のみに価値を認める意識となった。それがわれわれの持つ意識である。だがしかし、この意識は何をしてきたか。あるいはどのような世界を作ったのか。その答えとしてわれわれが提示できるのは、それほど愉快なものではないであろう。冒頭に述べたように、バタイユの生きた時代には二回の戦争があった。だからこそ、バタイユは『呪われた部分』を執筆したのである。

ここで『呪われた部分』の執筆意図を思い出そう。それは、何よりも、戦争を避けるエコノミーを切り開くことであった。そしてそのために必要となったのが、第一に、この世界が過剰に満たされていることを指摘することであった。にもかかわらず、われわれが消費や破壊を避けるという事態があった。この事態の探求において意識の問題が浮上したのであった。続いて、意識が消費や破壊を避けようとする理由が指摘された。すなわち、それは自己の存立の条件としてある死の恐怖が消費や破壊を遠ざけるといことが指摘された。バタイユはこれらの事実を明らかにし、この世界のエコノミーを変化させるこ

とを望んだ。つまり、従来のエコノミーの循環を破壊し、戦争を避けるエコノミーを切り開くためには、これらを理解することが必要と考えた。では、このエコノミーをどうやって変化させるか。

バタイユは次のように言う。

「自己についての明晰な意識の一つの根底として、内奥的な瞬間に解消され、破壊される物たちを考慮すべきであるという視点が導入される。それはある意味で、互いに一方が他方を食べる動物の状況への回帰であり、物と私自身との差異の否定である。(中略)もし、エコノミーの運動を保全する必要があるのなら、問題となるのは、超過する生産が河のように外へと流れ出すような地点を決定することである。つまり生産された物たちを限りなく消尽すること——あるいは破壊すること——が、問われるのである。たしかにそのことは最小限の意識なしでも行われることが可能だろう。が、しかし明晰な意識が優位を占める程度や範囲にちょうど応じて、実際に破壊される物たちは、人間たち自身を破壊しないであろう。個体としての主体の破壊は、なるほどそれとしての物の破壊のうちに含まれている。けれども戦争がその不可避的な形態であるわけではない。とにかく戦争はその意識的な形態ではないのである(少なくとも、自己意識が、一般的な意味において人間的であるはずだとするならば、そうである)」(Bataille[1973b:136-137=1985: 134-135] 強調はバタイユ)。

この言葉をこれまでの議論を加味して敷衍すれば以下のようになるだろう。死の不安に怯える意識に従属しては、われわれは従来のエコノミーに閉ざされてしまう。そして、この意識が労働から出てきたのであるなら、それとは逆の行為である消費や破壊により、その意識を消滅させることができるのではないか、そういった行為をとる限り戦争は避けられるのではないか。しかし、それは単純に破壊活動によるエクスターズやトランス状態に陥ることではないだろう。逆に、明晰な意識を維持したままなすことも可能であるだろう。バタイユの主張はこう

いった内容であるはずである。

明晰な意識を保持したままの破壊的行為とは、具体的にはどんな行為があるのだろうか。もともと、供犠からして、意識は完全に喪失されるわけではなかった。ということは、そのような行為をすることを勧めているのだろうか。重要事は、戦争を、悲劇を避けるエコノミーを切り開くことである。それを考えると、たしかに、単純に物を破壊することもその一つの方途ではあるだろうが、『呪われた部分』が採り上げた「歴史的資料」の最後のものが「マーシャル・プラン」であることを考慮するなら、「贈与」という形態もあることが指摘できる。バタイユはマーシャル・プランの分析において次のようなことを主張する。

「剰余の重要な一部を——見返りなしに——世界的生活水準の向上に捧げるよう仕向けるという事態、それは、産出された過剰エネルギーに戦闘以外の抜け道を与えるという経済の動きになるのだが、そういった事態が起こった場合のみ、人類はその諸問題の普遍的解決の方向へ平和的に赴くことができるであろう」(Bataille[1949:244=1973:253])。

マーシャル・プランは、おそらくは、バタイユの望んだ方向には一時的にしか(あるいはまったく)作用しなかった。それは、当時の東側との経済力の、軍事力の、そして政治力の格差をより広げた。しかし、それが戦争の回避にまったくつながらなかったとも言えないであろう。要するに、贈与はまったく「見返りなしの」贈与としては働かなかったということである。その後の時代を振り返っても、われわれにはバタイユが望んだものとは大きくかけ離れた世界しか見ることができない。そこは非生産的消費と贈与が十分になされ、エネルギーが流動する世界ではない。

では、なぜそのようなにならないのだろうか。バタイユの議論が十分理解されなかったからだろうか。それとも、彼の理論が部分的に欠陥を持っていたからだろうか。あるいはまた、彼の理論が全てにおいて間違っていたからだろうか。

われわれは今後、これらの問題を検証することになるだろう。

### 注

(1) ちなみに、当初「呪われた部分」は『エロティシズムの歴史』と『至高性』とを合わせて三部作にする予定であったとされている。

Bataille [1976a=1987]の訳者による「エロティシズムをめぐる走り書き——訳者あとがきに代えて」を参照のこと。

(2) 次のバタイユの説明を参照のこと。

「地球上での生命の歴史はもっぱら狂おしい充溢の結果である。すなわちその主要な事件は奢侈の発達、次第に経費のかさむ生命形態の産出に他ならない」(Bataille [1949:73=1973:42])。

「草食動物は植物に比べて——肉食動物は草食動物に比べて——一種の奢侈である(後略)」(Bataille [1949:78=1972:48])。

(3) 「労働とはエネルギーを放出することである」(Bataille[1976b:573=2003:351])。

(4) 「生産されたエネルギーの総量はその生産に要したエネルギーの総量を上回る」(Bataille [1976b:556=2003:313])。

(5) したがって、この世界には完全な生産も完全な破壊もない。この点についてはプロトウニツキの議論を参照のこと (Plotnitsky[1993:19])。

(6) 『呪われた部分』と『宗教の理論』の密接な関係については、今村 [1982 :191-204]を参照のこと。そこでは『宗教の理論』がエコノミー論、つまり普遍経済学によって根拠づけられていることが示されている。

(7) 以後述べる、道具の利用、労働、そして自己意識の議論に関しては、Bataille[1973b=1985]の第一部を参照にしている。

(8) また、次のようにも言われている。

「人間の遊び、真に人間的な遊びは、まず労働であった」(Bataille[1961:73=2001: 62])。

(9) また注(5)も参照のこと。

(10) 次の説明を参照のこと。

「個人的、個別的観点からしか不安はありえない」(Bataille [1949:80=1972: 51])。

「人間はそのいまだく〔死の〕不安、怖れのせいで労働の諸成果に結び付けられているのであるが、まさにちょうどそのように縛り付けられている度合いに応じて個人的なのである」(Bataille [1973b: 70=1985:67])。

(11) 「極限においては、私たちは私たちの生を危険にさらすものを断乎として欲する」(Bataille[1987:88=1973:124])。

(12) Cf. Bataille[1976b:186-188=2003:30-37].

(13) Cf. Bataille[1949:60-62=1973: 25-27].

(14) バタイユはこの思想を恐らくはコジエーヴ経由のヘーゲル哲学を介して手に入れている。Cf. 高橋[2011].

(15) 「〔祝祭が参加者に切り開く〕燃焼状態は逆方向に働くある種の知恵によって制限づけられている」(Bataille[1973b:118=1985: 70] □内は引用者による補足)。

(16) 「宗教は、その本質は失われた内奥性を再探求することにあるのだが、結局のところ全体として自己意識であろうとする明晰な意識の努力に帰着する」(Bataille[1973b:77=1985: 74])。

(17) 「生産する可能性、田畑を实らせ家畜を繁殖させる可能性が祭礼に与えられる」(Bataille [1973b:75=1985: 72])。

(18) 意識は理性とモラルを生み出すことによりやがて至高性を人間の世界から排除してしまう。この点については、Bataille[1973b:92ff =1985:90ff]を参照のこと。

### 参考文献

(邦訳のある文献の場合、本文中の引用箇所については一部変更したものもある)

Bataille, G. 1949 [1967] *La part maudite*, Minuit(=1973 [1989] 生田耕作訳『呪われた部分』、二見書房)。

—— 1961 *Les Larmes d'Eros*, Jean-Jacques Pauvert (=2001 森本和夫訳『エロスの涙』、ちく

- ま学芸文庫).
- 1970 “Dossier de l’œil pinéal” in *Œuvres complètes* [以下「*O.C.*」と略記] *II*, Gallimard, pp.13-47 (=1971 [1984] 生田耕作訳「松毬の眼」、『眼球譚／太陽肛門／供儀／松毬の眼』、二見書房、187-282 頁) .
- 1973a *L’expérience intérieure*, in *O.C. V*, Gallimard, pp. 7-234 (=1998 出口裕弘訳『内的体験』、平凡社ライブラリー).
- 1973b[1995] *La théorie de la religion*, Gallimard (=1985 湯浅博雄訳『宗教の理論』、ちくま学芸文庫).
- 1976a *L’histoire de l’érotisme*, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp. 7-165 (=1987 湯浅博雄他訳『エロティシズムの歴史』、哲学書房).
- 1976b *La limite de l’utile*, in *O.C. VII*, Gallimard, pp.181-280 (=2003 中山元訳『呪われた部分 有用性の限界』、ちくま学芸文庫).
- 1976c ‘Notes—Conference’, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp.563-592 (=1999 西谷修訳「非一知の未完了の体系 関連草稿」、『非一知』、平凡社ライブラリー、131-198).
- 1976d ‘Le paradoxe de la mort et la pyramide’, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp.505-520 (=1973 山本功訳「死の逆説とピラミッド」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、99-132 頁).
- 1976e *La souveraineté*, in *O.C. VIII*, Gallimard, pp.243-456 (=1991 湯浅博雄訳『至高性』、人文書院).
- 1987 *L’érotisme*, in *O.C. X*, Gallimard, pp.7-270 (=1973 渋谷龍彦訳『エロティシズム』、二見書房).
- 1988a “Du rapport entre le divin et le mal”, in *O.C. XI*, Gallimard, pp. 198-207 (=1973 山本功訳「崇高なものと悪との結びつき」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、226-242 頁).
- 1988b “la laideur belle ou la beauté laide dans l’art et la littérature”, in *O.C. XI*, Gallimard, pp. 416-421 (=1973 山本功訳「芸術および文学における美しい醜さ、あるいは醜い美しさ」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、259-268 頁).
- 1988c “Sommes-nous là pour jouer? où être sérieux?”, in *O.C. XII* (articles II, 1950-1961), Gallimard, pp. 100-125 (=1973 山本功訳「わたしたちが存在しているのは、たわむれるためか、まじめでいるためか」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、10-53 頁).
- 1988d “Hegel, la mort et le sacrifice”, in *O.C. XII* (articles II, 1950-1961), Gallimard, pp. 326-345 (=1994 酒井健訳「ヘーゲル、死と供儀」、『純然たる幸福』、人文書院、168-200 頁).
- 1988e “Hegel, l’homme et l’histoire”, in *O.C. XII* (articles II, 1950-1961), Gallimard, pp. 349-369 (=1994 酒井健訳「ヘーゲル、人間と歴史」、『純然たる幸福』、人文書院、201-236 頁).
- 1988f “Qu’est-ce que l’histoire universelle?”, in *O.C. XII* (articles II, 1950-1961), Gallimard, pp.414-436(=1973 山本功訳「世界史とは何か」、『神秘／芸術／科学』、二見書房、133-171 頁).
- Hollier, D. 1979 *Le collège de sociologie*, Gallimard (=1987 兼子正勝・中沢信一・西谷修『聖社会学』、工作舎).
- Plotnitsky, A., 1993 *In the Shadow of Hegel*, University Press of Florida.
- 今村仁司 1982 『暴力のオントロジー』、勁草書房
- 栗本慎一郎 1990a[1979] 『経済人類学』、東洋経済新報社。
- 1990b 『幻想としての経済』、青土社。
- 高橋紀穂 2011 「否定性の二重性」『太成学院大学紀要』第13巻(通号30号)、(太成学院大学) pp.213-224.
- 吉田裕 2001a 『異質学の試み バタイユ・マテリアリスト I』、書肆山田。
- 吉田裕 2001b 『物質の政治学 バタイユ・マテリアリスト II』、書肆山田。
- 吉田裕 2007 『バタイユの迷宮』、書肆山田。